

## ○ 活動報告

### 会員制情報誌に「金沢・能登の文化と加賀屋を訪ねる旅」を執筆

氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援） 都道府県：東京都

いしかわ観光特使として、7月1日発行の情報誌に「金沢・能登の文化と加賀屋を訪ねる旅～恵みを味わい大自然に癒される～」というテーマで紀行文を執筆しました。

記載誌は小さな会員制情報誌ですから、媒体としての発信力に限度があります。

紀行文は観光特使の名前でメール発信するか、プリントアウトして観光特使の名刺と共に配布いたします。



掲載された紀行文はこちらです



[金沢・能登の文化.pdf](#)  

# 金沢・能登の文化と加賀屋を訪ねる旅

## 恵みを味わい大自然に癒される

いしかわ観光特使 西島 幸夫

金沢は藩政時代に培った加賀百万石の文化のお陰で、明治以降も学都として栄えた。伝統工芸や稽古ことも盛んで、今日でも古い歴史と伝統文化が息づいている。TVで紹介される定番の兼六園のような観光名所でないスポットを訪ねた。能登の七尾・輪島へ足を伸ばし、能登のやさしい景観と

食を味わい、おもてなし文化の元祖・加賀屋に泊まった。2015(平成27)年3月に待望の北陸新幹線が開通すれば、東京・金沢間は2時間半で結ばれる。能登へのアクセスも便利になるので、能登の里山里海の魅力を手軽に訪ねることができるとも近い。

蓄音器の音で癒やされる

泉鏡花記念館を観て、すぐ隣の金沢蓄音器館(尾張町)を訪ね、久しぶりに手回しの蓄音器から聴こえてくる懐かしい音を聴いた。山田屋蓄音器専門店の永年のコレクションを基に全国からの寄贈も含め、収集されている蓄音器は600台。SPレコード2万枚以上。音の変遷を実際耳で聞くことのできる珍しい蓄音器博物館だ。スピーカーを通して伝わる空気の振動は、五感に訴える。ゆらぎ、効果があるのかCDよりも音に温もりがあって癒される音質だ。

SP盤は聴くたびに音の溝が磨滅していく。為いずれ廃盤になるが、その貴重なレコードを毎日聴かせてくれる。日に3回、11時、4時に解説付きで試験できる。今年の1月にじくなったパティ・ペイジのテネシー・ワルツを聴いた。訪れた指揮者の佐渡裕さんは「歌手が目の前で歌っているようなリアル感がある」と言っていたそうだ。針の雑音は胎児が耳にする音に似ている

ので聴く人の心を穏やかにするらしい。蓄音器の王様クレデンザ(米国製)でハンガリー狂詩曲を聴いた。懐かしい時代の気分が甦り涙を流す人もいるという。

心安まる鈴木大拙記念館

兼六園から21世紀美術館へ、すこし歩いて仏教哲学者・禅の研究者として世界的に著名な鈴木大拙の足跡を伝える記念館(本多町)を訪ねた。数点の書画が架けられ、全著作が並べられているだけで、難しい理論を押しつけるような展示は一切ない。閑な記念館だ。白を基調とする壁と回廊、澄んだ水を湛えた「水鏡の庭」、その背後に美しい本多の森が取り囲んでいる。「水鏡の庭」を望む思索空間で冥想していると自然に心が落ち着き、時を忘れていつまでも座っていたくなる。時空を超えた無心の心地になれるのは、禅の境地なのか? 23年秋開館で、これからも訪ねたい癒しのスポットだ。設計は谷口吉生、父君も金沢出

身の建築家谷口吉郎、東宮御所や帝國劇場などの作品で知られる。

大拙翁は私の卒業した新登町小学校の大先輩だ。明治3(1870)年開校し143年の歴史を誇る。先年訪れる機会があり、校長室に入ると大拙揮毫の「平常心是道」という扁額が掲げられていた。あ

るべきところにいい書が飾つてあると見入った。

数年前、能登半島の入り口にある、かほく市宇野気の西田幾多郎記念哲学館を訪ねたことを思い出した。宇野気は西田の生まれ故郷だ。哲学を身近に感じ、わかりやすく学んでほしいという安藤忠雄が設計したユニークな建築だ。このミュージアムのコンセプトは、心のオアシス、だという。館内に木村弘道画伯の「老当益壯」という大きな抽象画が飾つてあった。後漢書の出典で、「人間年をとればとるほどますます志を高くし、盛んな意気を持つべきだ」と解説されていた。シニアを励ます箴言に新たな元気を貰った。大拙・幾多郎はともに

第四高等学校(四高・現金沢大)で学び、生涯深い交わりを続けた仲だという。若くして禅の道を歩みつつ東洋の精神的伝統を体現しようとした二人についてもっと学びたいと思った。

七尾生まれの絵師・等伯偲ふ

金沢から七尾線に乗って能登半島に向かう。JR七尾駅を降りると、駅前広場に立つ戦国時代の絵師長谷川等伯の銅像が迎えてくれた。一昨年、日本経済新聞朝刊に連載された安部龍太郎の「等伯」を読んでいたので、等伯のふるさとを訪ねた。七尾は室町時代から畠山氏が守護として治め、9代180年の歴史をもつ城下町。後に前田利家の領地になったが、良港にめぐまれ北前船の寄港地として各地の文化を取り入れ北陸一の賑わいを見せた。七尾美術館に長谷川等伯の作品が2点展示されている。等伯は33歳の時に妻子とともに上洛し多くの苦難に立ち向かい、絵師として世に出たのが51歳、やがて秀吉に認められ天下一の御用絵師に登りつめた。2010年2月、東京国立博物館で没後400年「長谷川等伯展」を観た時、精緻で色鮮やかな仏教画、それによって大胆な構図や大きさに圧倒された。安部龍太郎は水墨画「松林図屏風(国宝)」を観た時、衝撃のあまり棒立ちになった。霧が漂う不思議な寂寥感は、人生の悲しみ喜びを味わい尽くした末に辿りついた等伯晩年の心象を描いたといわれる。松林はふるさと能登の松林風景だともいう。安部さんは等伯の苦難が自分の経験とも重なり素直に感

情移入でき、等伯に手を引かれるように書いているうちに高い所に辿りついていたと語る。「等伯」は今年1月直木賞に輝いた。港に近い一本杉通りを散策すると、どっしりした構えの蠟燭屋、醤油屋、昆布屋、仏壇店などの老舗が連なり、北前船が運んだ古い文化を感じる街並みだ。七尾湾を遊覧し、等伯が見たであろう松林を探した。富山湾の先に望めるはずの立山連峰は霞んで見えなかつた。きれいに見える時は風にならという。

### 加賀屋・もてなし文化の極致

いざ温泉へ。和倉温泉は能登半島中部、七尾に近い開湯1200年の温泉地。宿泊した加賀屋は明治39年創業、心づくしのもてなしで知られる。穏やかな内海と対岸に能登島が望める大浴場でゆったりした時間を過ごす、館内の意匠も豪華を極め、エンター

テイメントに溢れていた。大女将の丁寧な挨拶を受け、細やかなサービスも行き届いていた。お客さまのニーズを酌んだサブライズ演出もあって、加賀屋の素晴らしいさを満喫した。

能登名産「くちこ」を食べた。能登で獲れたナマコの卵巣を素干しにしたものを軽く弱火であぶると酒の肴として美味しい。ナマコは少量しか取れないので高級珍味として珍重され、ウニ、カラスミと並び称される三大珍味の一つだ。

加賀屋の「もてなしの奥義」は、台北の北投温泉にも進出し、いまや国際的な評価を受けるまでになった。

### 歴史豊かな能登の里山里海

翌朝、輪島の名物朝市へ。能登半島先端の漁業の町で、海産物が豊富で安い。能登の女性は働き者で、高齢女性の商う姿は威

勢がいい。伝統工芸輪島塗の生産地としても高い。

5月29日から2日間、世界農業遺産国際会議が七尾(和倉)で開催された。環境悪化に伴い衰退が懸念される伝統農法や景観、生態系などを次世代に継承するのが狙いで、2002年に国際食糧農業機関(FAO)の創設。日本で最初(2011年)

に世界農業遺産に登録されたのが、能登の「里山里海」である。今度の国際会議で新たに日本の3地域、静岡(掛川地区)、熊本(阿蘇地域)、大分(宇佐地域)が認定された。東京ではほとんど報道されていない世界農業遺産だが、認定地が増えることで知名度向上につながって欲しい。

久しぶりに輪島の棚田・千枚田を観光。海岸線に向かう傾斜地に約1000枚の小さな田圃が段々に連なる眺めは壮麗だ。平野の少ない能登の厳しい自然と闘って丹精込めて守ってきた景観だ。また400年

前と変わらぬ伝統手法の「揚げ浜式製塩」などが登録の対象になっている。誰でもが懐かしむ何気ない自然の風景が、地域独特の海の幸・山の幸をもたらし、暮らしを豊かなものにしている。イカの肝を熟成させた魚醬油(いしり)は能登でしか味わえない希少な食文化だ。

旅の終わりに、能登に配流された平家の末裔「時国家」(重要文化財)を訪ねた。文治元(1185)年から24代続く茅葺入母屋造り屋敷、うっそうと茂る椎の木と回遊式庭園に通かる歴史の「ページ」を見る思いがした。

帰路は能登空港から僅か1時間のフライトで羽田へ着いた。「能登はやさしや土までも」といわれたが、北前船が運んできた文化や歴史に触れて、能登の里山里海の奥深さをもっと知りたいと思うようになっていく。

(了)



特別名勝兼六園。清らかな流れに架かる雁行(かりがね)橋



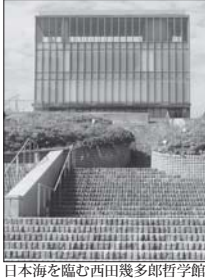
水鏡の庭(鈴木大拙記念館)



活気ある朝市風景(輪島)



一本杉通りの老舗風景(七尾市)



日本海を臨む西田幾多郎哲学館



青雲の志を抱く等伯像(七尾駅前)



300年前の付まい平家の時国家



奥能登の棚田風景(上)、夕日に映える千枚田(下)(輪島市)

